

---

# 名探偵コナン 短編集

真知歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵コナン 短編集

### 【Nコード】

N4971Z

### 【作者名】

真知歌

### 【あらすじ】

リクエストOK!! 名探偵コナン短編集

新蘭、コ蘭、平和、快青、新志、コ哀…

となんでもあります

恋愛ものから組織ものまで場面はどうゆうのでも構いません <

>!!

気軽にリクエストお願いします(^ ^〃  
-  
=

**File・1 露出狂の白雪姫（前書き）**

こんにちわ 短編集はぢめました

リクエストお待ちしております・ ・v+

リクエストは…

?カップリングは誰と誰か

?大ざっぱで良いのでどんな場面で

?どうなってほしいか

をお願いします

今回は星野由佳里さんのリクエスト、新蘭で文化祭です

## File・1 露出狂の白雪姫

「ではこれで決まりです」

キンコンカンコン…

教卓に立つ教師がそう言うのとタイミング良くチャイムが鳴った

そう、ここは帝丹高校

間近に迫る文化祭での出し物の劇の役がどうやら決まったようだ

黒板に書かれた“白雪姫（特別バージョン）”

その横に並んで書かれた配役

王子様：工藤新一

お姫様：毛利蘭

まあ、いつものパターンだ

だがこの白雪姫（特別バージョン）の台本を書いたのは…

「ねえ蘭 面白いでしょ？この台本」

陽気に話す鈴木園子だということを忘れてはいけない

「ちょっと何なのよこれ」

「あらら、お姫様が二人いちゃ不満なの？」

そうこの白雪姫（特別バージョン）にはお姫様が二人出てくるのだ

王子様は当然園子が推薦した新一

お姫様Aも当然園子が推薦した蘭

そしてお姫様Bは新一LOVEな女子達を追っ払って自分で立候補した園子だ

これには色々とわけありらしい

「蘭がまだ新一君にロンドンでの告白の返事しないからこつゆつこつになるのよ」

「はあ？なにそれ？どうゆうこと？」

「んまあ当日のお楽しみよ」

鈴木財閥の令嬢は何でもありだ

「新一君も、最高の劇にしてよね」

今にも寝そうな新一に向けて園子はそう言った

「あん？ああ……」

文化祭当日

舞台裏では劇の順番が2年B組に迫っているために慌ただしかった  
そんな中で

「わあー蘭最高」

自分が用意した衣装のドレスを着た蘭を見て瞳を輝かせる園子

「ねえ…なんかこれ白雪姫とは違うくない？」

「そう？」

「だって白雪姫ってこんな園子みたいに露出なんてしてないよ？」

園子オーダーのそのドレスは一応配色やデザインは白雪姫っぽくなっているのだが

お尻がやっと思えるくらいの超ミニで

胸元がガッツリ開き谷間が見えている

というような衣装だった

「これじゃあ恥ずかしいよ」

「大丈夫、大丈夫　じゃあ私新一君の様子見てくるから蘭はそこから出ちゃダメよ？」

そう言って園子は更衣スペースから出ていった





## File・1 嫉妬する王子様

「新一君 入るわよ」

そう言つて新一を覗くと

「おゝ！！いいじゃない」

いかにも王子様がそこには居た

「これやりすぎじゃねえのか？」

「いいのいいの そのくらいじゃないと蘭に負けちゃうのよ」

「蘭はどうゆう衣装なんだ？まさかこんなキラッキラしたようなドレスとかじゃねえだろうな？」

新一は横目で園子に聞いた

「キラキラしてたら蘭の美人さが増して新一君大変だもんね」

嫌みつたらしく園子が言う

「大丈夫よ キラキラはしてないから！」

「ほんとかよ…」

不満そうな顔でボソツと呟く

『それでは2年B組で白雪姫、特別バージョンです』  
いよいよ劇が始まった

『あるところに白雪姫というお姫様がいました…』

舞台に光が浴びせられ蘭が登場する

「わあ〜」

「かわいい〜」

「毛利先輩、付き合って〜」

その蘭の姿に劇を見ている観客や後輩達はそう歓声をあげた

舞台裏で出番の準備をしている新一は

（そんなに？…）

まさかの一同のリアクションに驚き妬む

『白雪姫は実はもう一人いたのです…』

そして園子が登場する

「おゝほっほっ、王子様と熱い口付けを交わすのは私よ」

蘭と似たような衣装なのに誰一人として興奮するものはいない  
それどころか皆そのなりきっている演技にひいている

『そこに来た王子様は白雪姫が二人いてビックリ…』

とここでやっと登場した新一

「おお、なんて美しい…姫…君…た…ち…」

新一は蘭を見てその美貌に惚れるものの

(そおゝのおゝこおー！ー！！！！)

一気に園子に対して怒りが芽生えた

「さあ 王子様どうか私と熱い口付けを…」

そんなものはおかまいなしに演技に没頭する園子

「いいえ、どうか私と口付けを…」

蘭も新一の前で恥ずかしがりながら演技に集中する

「これは困りました…」

ではどちらが私にふさわしいか毒リンゴで…

「いいえ！私よ！！」

突然力強くそう言った園子

2年B組のクラスメート達は啞然とした

なぜなら…

（園子？…間違えた？今は新一の見せ場で、そんなの台本になかったけど…）

## File・1 小悪魔なお姫様

「さあ、王子様、早く!」

近寄る園子に新一が小声で

「「おめえ、間違ってるぞ」」

そう言われた園子はニンマリした

(えっ?…)

訳の分からない新一と蘭

だが園子の演技は続いた

「さあ、王子様…

あんな姫なんかよりも私を」

そう言いながら新一の腕を掴む

「そ…園子?…」

「早く私と熱い口付けを…」

園子はそう言うと新一の顔に唇を近付ける

「「お、おい！いい加減にしろよな！」」

観客達は真剣にその行く先を望んだ

「あゝん 王子様」

園子の甘い声が飛んだ瞬間…

「ダメーーーー！！！」

思わず叫んだ蘭

それを聞いた園子はまたニンマリする

「あら？あんた王子の何なの？」

「わ…私は…」

まさかのアドリブに戸惑う蘭

「あんたも王子様と口付けを交わしたいのかしら？」

何かを企む園子は言った

最早“お姫様B”ではなく“鈴木園子”だ

「お…王子様と口付けを交わすのは私です」

台本のままの台詞を言う蘭に園子は嫌気がさし更に小悪魔になった

「バカね、王子様は私が好きなのよ」

そう言っただけ園子は新一に抱きついた

（園子、後で覚えてろよ…）

園子の作戦が読めた新一は心の中でそう言った

その瞬間“あー”と思った蘭は王子様の元へ駆け寄った

「私は王子様が好きよ…」

あんたはどうなの？はつきりしないと私が唇を奪ってしまうわよ」



最早“白雪姫”でもなければ“白雪姫（特別バージョン）”でもない

「私も…私も王子様が…好きです…」

「それで？口付けを交わしたいのかしら？」

「えゝだって今は劇中だからそんなこと言えないよゝ」「

小声で園子にそう言う蘭は完全にパニックっている

「バカね、これは劇なんだから台本通り“はい、したいです”って言えばいいのよ！」「

そう返された蘭は

「はい、私も王子様と口付けを交わしたいです…」

よし、と思った園子はあとも少し！と最後の台詞を言おうとした  
…が

「ならば王子様にどちらが良いか選んで……………ってあれ？…」

## File・1 愛の口付け

ここまで散々な目に遇わされた新一はやってやった

園子の台詞の前に

抱きつく園子を払いのけ

蘭の腕を引き寄せて

自分の胸へと包み込み

抱き締めて

蘭の唇に自分の唇を重ね合わせた

それを見ている観客は呆然とし中には鼻血を垂らす者もいた

（ちよつと！？新一！？…）  
「んーんー」

蘭が喋ろうとすると

「黙ってる」

そう一言だけ言い

再び唇を重ね合わせた

蘭の格好を目の前にする新一のキスはだんだんと深くなっていこうとするが…

「「ちょっと、新一君!」」

まさかの園子の止めが入り急遽幕が降ろされた

そして幕の向こう側では…

「おい!! 探偵坊主!! おめえ人の娘に手エ出してただで済むと思うなよ!!!!」

怒鳴り散らす小五郎がいた

「新一…何やってるのよ…」

蘭はクラスメート達を目の前に動揺した

「嫌だったか？」

もしかすると新一の方が園子より小悪魔だ

「嫌ってことないけど…」

「中々返事しないからこうゆうことになるのよ！おゝほっほっ…まあでもこんな風になるのは予想外だったけど…、これに懲りたら蘭、早く返事を新一君にしてあげなさい」

そう言われた蘭はクラスメートを一通り見回す

皆は今か今かと言わんばかりの顔で蘭を見つめている

「あの時の返事…今してもいいかな？」

「ああ」

「私…、」

私も…

私も新一のことが好き…」

その瞬間一気に騒ぎ出したクラスメート

「ヒューヒュー」

「遂に結婚か」

「よっ！工藤夫妻！！」

「おめえらうるせえ！いい加減にしろよ、これからが見せ場なんだからよおっ」

そう言うとな新一はまた蘭を抱き寄せて

怖いくらいの包容力で包み込み

蘭の唇へまた熱い口付けをおとしたのだった

END

File・1 愛の口付け（後書き）

ありがとうございます  
お疲れ様でした。

いやー蘭ちゃん羨ましいです（笑）

感想お待ちしております！！

**File・2 気に入らない（前書き）**

こんにちは真知歌です

今回のリクエストは

またまた星野由佳里さん

ありがとうございます

新蘭でヤキモチです！！

## File・2 気に入らない

「ねえ、新一どれにする？」

学校帰りに新一と雑貨屋に来た蘭

お揃いのストラップを買おうと蘭は一生懸命選んでいる

なのに新一は…

「俺はなんでもいいぜ？」

全くこの雑貨屋に興味がない

「おっ！蘭、俺向かいにある本屋行ってくるから適当に選んどけよ！」

そう言ってさっさと行ってしまった新一

「もおゝ何なのよー」



「おっ！出てる出てる！」

そう嬉しそうな顔をする新一は一冊の推理小説を手を取った

昨日発売されたばかりの本だ

本屋で真剣に立ち読みを始める高校生探偵、工藤新一

・・・

気付けばあれから30分もたっていた

「蘭まだか？・・・」

そう呟き向かいの雑貨屋を見ると・・・

「ん？蘭…の隣の奴誰だ？」

蘭の隣には同じ帝丹高校の制服を来た男子二人組が立ち何やら蘭と楽しそうに話していた

（プチッ・・・）

別に蘭とは付き合っている訳ではないが何か無性にイラッと来た新

「は蘭の元へ走っていった

「毛利先輩ってそうゆうのが好みなんすね〜意外というか可愛らし  
いっすね〜」

蘭に気を寄せている一年の男子だった

「そう？でもこうゆうデザインの結構好きよ」

「へえ〜もしかしたら今度一緒に遊びませんか？」

「そうゆうストラップとか雑貨俺から毛利先輩に買わせてください  
！」

「いや〜年下の子におごってもらうのって何か気が引けるし…」

「年下って一個しか変わらないじゃないっすか！」

「んまあ…そうだけど」

「あれ？同じストラップ二個買っくんすか？…もしかして工藤先輩と  
付き合ってるんすか？」

蘭が同じストラップを二個持っているのに気付いた後輩は悲しそうな  
顔でそう聞いた

「あゝこれ？…」

蘭が何か言おうとすると後ろから何者かが走ってくるような気配がした

蘭と後輩二人がそちらを向くと

「あつ新一」

「く…工藤先輩」

気に入らないような顔で後輩二人に歩み寄りこう話し掛けた

「空手都大会優勝のこんな強エ女に何か用か？」

「と…都大会つてすごいじゃないっすか！」

「それに毛利先輩は空手強くてこんな可愛らしい物が好きなんて…いいじゃないっすか…ギャップ…」

「…あん？」

そうゆう後輩二人に更に近付き威嚇する



## File・2 ヤキモチ

「おめえらな、空手都大会つつたらその辺の電柱バキバキと折るんだぜ？」

「ちよつと新一！そんなことしないわよ！！」

「まさか…しないっすよね」

ちよつと怖くなった後輩二人

「それにな…」

と新一は後輩二人の耳に近付き内緒話を始めた

「コシヨコシヨ…」

内緒話をされながら蘭をチラッと見た後輩

「な、なによ？…」

不思議に思っ蘭

「コシヨコシヨ…ってわけなんだ」

「ま…まじっすか？」

「毛利先輩すみません、自分これから用事があるんで…」

そう顔を悪くしながら言う後輩二人

「まっ、夜道には気を付けるんだな！」

新一がそうゆうとその後輩二人は駆け出し去っていった

「ちょっと新一何て言ったのよ？」

「あん？まあ…なアハハ」

ごまかす新一

「ちょっと俺喉乾いたからその自販機で飲み物かってくっから」  
こでまってるよ」

そう言い本屋の前にある自販機へ行く新一

（ふう）…

まさか毛利蘭の大好物は虫料理で

朝晩の主食はカエル、それに一緒にいると好物の虫料理を食べさせられて断ると裏拳が飛ぶ…

なんて口が裂けても言えねえぜ…）

そう心の中で呟く新一は何処か満足げな顔をしていた

ジュースを買って蘭の元へ戻ろうとした新一はまたムカツク光景を目にした

（おいおい何だアイツ…）

今度はただの後輩やファンではなくナンパ目的のチャラそうな男三人組だった

（鼻ピに、ベロピ、金髪にツイスト…ケツきもちわりい）

だが新一の表情は先程より余裕だった

（バー口、チャラそうな奴を蘭が相手にするはず…

といきなり聞こえた蘭の甲高い声

「えっ？そんなんですか？私も好きです」

新一は目が点になった

だがすぐにムカついた表情に変わりドシドシと歩いて蘭の元へ戻る

どうやら蘭の持っていたお菓子の袋が会話のテーマだったらしい

「そこのお菓子マヂうめえよ」

「はい、私もよく買っんです」

そこに新一が割り込んで来た

「ちょっとすみません、この子に何か用ですか？」

不機嫌そうな顔でそう聞く新一

「あつちよつと新一、私達はただ…」



「私達だあ？」

蘭のその言葉で更に機嫌が悪くなった

「なんだ？姉ちゃんの友達か？」

「あつ幼馴染みの工藤新一です…」

（幼馴染み…ね）

## File・2 仇となる

「工藤新一？なんか聞いたことあんだけど」

「そうか？」

（こいつら俺の名前知らねえのかよ…）

イライラする新一は遂に言った

「僕は高校生探偵、工藤新一です！！！」

そしてこの娘は僕の最愛の恋人です！！！！

何かあるなら僕に許可を得てから話し掛けてください！！！！」

（新一…）

「あゝ探偵ね！」

「なんだ探偵か！」

「何か大丈夫か？」

迫力のある言葉を言った新一の周りではメラメラと火があがっていた

「「なんか危なくね？」」

「「ああ、気色わりいから帰ろっぜ……」」

そんなことを言いながらナンパ三人男は帰っていった

「ふっこの名探偵工藤新一の名を出せばたちまち恐れて帰ってゆく  
…フフ…ハッハッハッ」

（なんか今日の新一おかしい…）

「ねえ新一！」

「なんだ？」

早々と我にかえる新一

「さっきの言葉って本当？」

「あん？さっきの言葉？」

「ほら、最愛の…ってやつ」

「・・・」

「俺なんか言っただか？…」

照れ臭い新一は覚えてないフリをしてとぼけてみせた

だがこれが蘭を怒らせることに…

「…何よ！！新一なんか知らない！！」

「軽々とあんなこと言えるなんて新一の方がチャラ男よ！！もおストラップも返品してくるんだから！！新一なんか大ッ嫌い！！！！」

「私今度ナンパされたらついていっちゃおう！！！！」

その言葉に焦る新一

「ああ…わりい蘭！！冗談だつて」

さっさと行ってしまった蘭に必死でついて行く新一

この二人が付き合い出すのはもうそこまで来ていることだろう…

E  
N  
D

## File・2 仇となる（後書き）

ありがとうございます

お疲れ様でした（＾o＾）

ご希望頂いたものと少し違うようでしたらごめんなさい…。

感想お待ちしております・・！！

一部、蘭に話し掛けたチャラそうな男に対して“新一「きもちわりい」”という言葉で表現しましたが、あくまでも新一のヤキモチで新一も作者も実際にはそう感じていることはありませんので、もし誤解される方がいましたら申し訳ありません。その辺りのご了承、お願いします。

File・3 河川敷で…（前書き）

今回はコ哀です

ほのぼのした二人の恋愛模様をとくにご覧あれ（  
^ ^  
）・  
+

File・3 河川敷で…

「ねえ工藤君…」

「あん？」

見慣れない街の河川敷にしゃがみこみ二人で話すコナンと灰原

「キス…」

「えっ！？…」

灰原の一言に驚くコナン

当たり前だ“キス”と言っただから

それに続く言葉は“していい？”か“して”に決まっているとコナンは思った



「バ、バ―ロ…こんな真っ昼間からこんなたくさんの人が後ろを通  
行してるっつつのに何言ってたよ…!」

顔が赤くなり焦るコナン

そんなコナンを横目で見て一言…

「何言ってたんだよ!!」はあなたの方だけど…」

「えっ!?!…」

「キス…、川にキスが泳いでいるって言いたかったんだけど」

「あっ? ああ、なんだ…」

妙に慌てているコナン

「なんだ…、じゃないでしょ?」

「えっ？」

「えっ？じゃないわよ、こんな川にキスが泳いでいるのよ？」

「あっ…ああ、本当だ…、妙だな…」

そう言うコナンだが魚のことなど今は頭になんか入っていない

そんな様子のコナンに灰原はもう一言

「今、変なこと妄想していたでしょ？」

「へ…変なこと？ってなんだよ…」

「声が裏返っているわよ」

「バー口…おめえがいきなり変なこと言い出すからだろ」

「私？」

「あ、ああ……」

灰原はコナンを見つめて『プッ』と笑う

「あんだよ……」

「別に？博士が待っているから戻るわよ」

「あっちよっ待てよ！」

そう言っで行こうとする灰原の腕をガッと掴むコナン

その衝動で灰原はコナンの上に倒れ込む

「……」

「  
…」

顔が赤くなる二人の時間が止まる…

そんな中コナンは灰原の頬に手を添える

「キス…していいか？」

「魚のこと？…」

少しとぼけてみせる灰原

すると

「違エよ…」

そう言ってコナンは灰原を引き寄せて軽く口付けを交わした

灰原の腕も自然とコナンの腰に回る

真っ昼間にたくさんの人が通行する中

コナンと灰原の重なりあったシルエットが輝いて見えた

END

File・3 河川敷で…（後書き）

ありがとうございます  
お疲れ様でした！

感想お待ちしております・  
・V

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4971z/>

---

名探偵コナン 短編集

2011年12月20日16時45分発行